

Title	私の略歴
Sub Title	Chronologie sommaire et Travaux
Author	朝吹, 亮二(Asabuki, Ryoji)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2018
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.139 (2018. 2) ,p.181- 186
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	朝吹亮二先生退職記念特集号 = Theses in honour of the retirement of professor Asabuki, Ryoji エッセイ
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000139-0181

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

私の略歴

朝 吹 亮 二

1952年4月30日、慶應義塾大学病院（東京）にて、朝吹三吉、京の次男として生まれる。

1958年、法学部でフランス語の教鞭を執っていた父が、前年より慶應義塾大学を休職し、パリのユネスコ本部で文化局次長を務めていた関係で、父の後を追って母とパリへ行くことになる。幼稚園を中退し（中退にあたって演劇会を開いてもらい、「白雪姫」の王子役をおなさけでいただくが、情けないことに白雪姫を含め七人のこびとも全員が私より背が高かった）、小学校3年生までのほぼ4年間をパリで過ごす。寄宿生活、避暑地の光景、初恋など、フランスの思い出は多々あるが、いずれ書き残す別の機会もあろうかと思う。ただ、外国の地で、三島由紀夫氏にお馬さんになって鳴き真似をしてもらい背中の上であやしてもらったこと、プロレスラーの力道山に、左肩には巨大な大理石の柱、右肩には私が肩車されてパリの蚤の市で一緒に買い物をしたことなどは愉快的記憶なので書き残しておきたい。

1961年夏、日本に帰国。2学期より暁星小学校3年生に編入。後の明治学院大学教授の工藤進先生には、暁星の小学校と高校でフランス語を教わり、ランボーやプレヴェールのポケット版詩集をいただき、フランスの詩に触れたこともあった。しかしながら、むしろそれは例外で、中学、高校の頃はあまり本などは読まず、もっぱら楽器を弾くロック少年だった。しかし、受験が近づくにつれ、一種の逃避行動だろうが、受験勉強をするふりをして少しずつ小説などを隠れて読み文学に関心を持つようになる。

1971年、慶應義塾大学文学部に入学。文学的に奥手であるという自覚もあって、古今東西の文学書を手あたりしだい読みあさる。ロック少年から突然熟

烈な文学少年になったのだ。神田の古本屋街にも足繁く通うようになった。アンドレ・ブルトン『ナジャ』を読み、強い刺激を受ける。学部の卒業論文から始まり今日まで続くブルトン研究のきっかけとなった。

1972年、フランス文学科に進む。この頃より日本の同時代の現代詩に出会い、自分でも詩を書くようになる。

1975年、フランス文学科を卒業。この頃、すっかり詩の虜になっていて、ほとんど大学の勉強をせず、大学院を受験するも不合格になる。多少心を入れ替えて受験勉強をし、翌年どうにか合格する。

1976年、慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程フランス文学専攻入学。

1979年、修士課程修了、同博士課程入学。しかし、研究者の卵といわれる生活をしていたかどうかは怪しく、反省しきりである。一方、詩への偏愛は深まり、この年の秋には、第一詩集『終焉と王国』を仏文科の同級生がおこした青銅社という小さな出版社から自費出版で刊行する。

1980年より、時期はまちまちだが、杏林大学医学部、慶應義塾大学文学部、法学部、慶應義塾外国語学校などで非常勤講師としてフランス語の教鞭を執りはじめる。

1982年、博士課程単位取得退学。第二詩集『封印せよ その額に』を同じ青銅社から自費出版する。

1983年、佐分純一先生をはじめとする諸先生方にご推薦いただき、慶應義塾大学法学部専任講師に就任。翌年、就任2年目にして入学試験の業務にたずさわる。この業務は後にもう一期、そして日吉主任時代を勘定に入れれば、12年間も関わることになる。現在と異なり、各試験には必ず面接があり、特に入試本番前後の1ヶ月は本当に緊張の連続の日々であった。しかし、普段接触の機会も少ない三田の諸先輩や同僚たちとも面識を得ることができ、今から思えば辛だけの仕事ではなかった。また学部の仕事としては1986年10月より合計8年間、学習指導副主任を務めた。

1987年、第三詩集『opus』（思潮社）にて第25回藤村記念歷程賞を受賞する。

1989年に第四詩集『密室論』（七月堂）を刊行。

1990年、助教授に昇任。同年4月より慶應義塾外国語学校主事、これもま

た7年間務める。

1994年、第五詩集『明るい箱』（思潮社）を刊行する。

1997年、法学部教授に昇任。1999年10月より2001年9月まで学習指導主任。思うところがあり、徐々に詩を書かなくなる（2009年頃まで）。

2001年10月より日吉主任。2009年9月まで4期8年間務めることになる。この8年間についてはむろん様々な思いや思い出があるが、正真正銘まったく不向きな役職をどうにか務めてこられたのも、各時期の学部長、森征一先生、小此木政夫先生、国分良成先生に助けていただいたからであるし、同僚の先生方に支えていただいたからでもあり、そしてフランス語部会の皆さんにはむしろいろいろと犠牲を強いてしまい、こうしたことに感謝とお詫びを記しておきたい。また私が役職を退いた後、日吉主任に選任された武藤浩史先生、後の大石裕学部長にはいろいろと配慮をいただき感謝申し上げたい。

2009年9月より1年間研究休暇をいただく。就職以来初めて、教壇、役職を一時的に離れることができ歓喜する。この頃より詩の創作を再開しており、2010年の秋に、単著詩集としては6冊目、選詩集や共著の詩集を含めると10冊目となる詩集『まばゆいばかりの』（思潮社）を刊行し、翌年、第二回鮎川信夫賞を受賞する。

2016年には、これまで発表してきたアンドレ・ブルトンについての拙いノートや論文を、慶應義塾大学法学研究会、岩谷十郎学部長、下村裕日吉主任のご援助のおかげで『アンドレ・ブルトンの詩的世界』と題し一冊の本として纏めることができ、さらには福澤賞までいただくこととなったのは、誠に望外のことであった。

2018年3月、定年退職により、35年間お世話になった法学部を去ることになる。これから長い研究休暇に入るということだろうか。

業績一覧

論文・論文ノート：

アンドレ・ブルトンの詩的共著作品について，フランス語フランス文学研究
39号，1981年10月

アンドレ・ブルトンにおけるイマージュ論の展開，教養論叢 68号，1985年1
月

「溶ける魚」論Ⅰ—オートマティスムとは何か，教養論叢 77号，1988年3月

「溶ける魚」論Ⅱ—溶解する「私」，教養論叢 84号，1990年3月

「地の光」論，慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学 11号，1990年
10月

「狂気的愛」における結晶，教養論叢 93号，1993年3月

「水の空気」についてのノート，教養論叢 95号，1994年2月

アンドレ・ブルトンの詩の読解，教養論叢 105号，1997年3月

シュルレアリスムの都市についてのノート，教養論叢 107号，1997年12月

アンドレ・ブルトンにおける詩的アナロジーについてのノート，教養論叢 118
号，2002年6月

アンドレ・ブルトン，ジョアン・ミロ『星座』について，教養論叢 132号，
2011年3月

批評・エッセー等：

『磁場』序説，『シュルレアリスムの思想』中，思潮社，1981年6月

テキスト音空間としての音空間テキスト，特集・音そして音空間，現代詩手
帖，1983年9月

身体の記憶，特集・ラヴクラフト—幻想文学の彼方に，ユリイカ，1984年10
月

沈黙／白紙について，特集・ジョン・ケージ，現代詩手帖，1985年4月

あるいは複数性の詩，特集・〈前衛〉の彼方に，現代詩手帖，1985年7月

食べられるダリ，特集・ミノトール，アールヴィヴァン 22 号，西部美術館，
1886 年 11 月

イマージュの変身譚，特集・シュルレアリスムと 20 年代—ブルトン，バタイ
ユ，ツァラ，現代詩手帳，1988 年 9 月

死ハ人生ノ出来事デハナイ，追悼・吉岡実，ユリイカ，1990 年 7 月

永遠の未完—滝口修造の詩的行為，特集 滝口修造・新解説，現代詩手帖，
1991 年 3 月

博物誌の方へ，特集・アンドレ・ブルトン—シュルレアリスムの法王，ユリイ
カ，1991 年 12 月

異邦の言葉，特集・生誕 100 年西脇順三郎読み直し，現代詩手帖，1994 年 2
月

アンドレ・ブルトン年譜，特集・いま，アンドレ・ブルトン，現代詩手帖，
1994 年 10 月

コラボレーション考，『文学のすすめ』中，筑摩書房，1996 年 12 月

瀧口修造の空所，「to and From Shuzo Takiguchi」，慶應義塾大学アートセンター
／ブックレット 14 号，2006 年 3 月

マルセル・デュシャン語録の語，「東京ローズ・セラヴィー—瀧口修造とマルセ
ル・デュシャン」，慶應義塾大学アートセンター，2012 年 3 月

西脇順三郎のシュルレアリスム，「光源体としての西脇順三郎」，慶應義塾大学
アートセンター／ブックレット 21 号，2013 年 1 月

詩は未来からやって来る？—アンドレ・ブルトンと詩的想像力，ユリイカ，
2016 年 8 月臨時増刊号 総特集・ダダ・シュルレアリスムの 21 世紀，2016
年 7 月

翻訳：

アンドレ・ブルトン「日々の魔術」（巖谷國士氏との共訳），ユリイカ／臨時増
刊号総特集・シュルレアリスム，1976 年 6 月

日本研究の意義／講演，クロード・レヴィ＝ストロース，日仏文化，1981 年 3
月

シュルレアリスム資料「バレス裁判」(「リテラチュール」誌, 1921年8月, 20号掲載)／特集・ダダ・シュルレアリスム, ユリイカ, 1981年5月
ルイ・アラゴン著「現代文学史草案」(翻訳および註解), ユリイカ 1981年9月

対談・座談会：

対談：踏みとどまる過激さとは何か(飯島耕一氏と)(現代詩手帖, 特集・対談飯島耕一・朝吹亮二〈いま-ここ〉の言葉から)1988年4月

座談会：現代詩の“見慣れた風景”を越えて(年間詩集評'88)現代詩手帖, 1988年12月

対談：断片として, 生き続けること・書き続けること(松浦寿輝氏と)(現代詩手帖, 特集・ミシェル・レリス)1989年6月

鼎談：アンドレ・ブルトンまたは近代の大いなる「器」, 特集・アンドレ・ブルトン—シュルレアリスムの法王, 現代詩手帖, 1991年12月

対談：詩をめぐるコラボレーション(吉増剛造氏と), 慶應義塾大学アートセンター／ブックレット01号, 1995年12月

対談：「ツァラの〈無意味〉, ブルトンの〈驚異〉」(塚原史氏と), 現代詩手帖, 特集・ダダ・シュルレアリスムの可能性, 2017年3月

単著：

アンドレ・ブルトンの詩的世界, 慶應義塾大学法学研究会, 2016年10月(福澤賞) 以上の論文, 批評のうち, アンドレ・ブルトンに関連するものを収録した。